ずいそう

飛騨トンネル開通に『荘川桜』を想う

鈴　木　哲　成

難関工事であった飛騨トンネル全長（10.7 km）が完成し東海北陸自動車道は全通となった。

お蔭でチューリップで有名な砺波・文化都市金沢・新鮮な魚介類の豊富な氷見漁港へのアクセスが大変良くなり有難く思っている。白川郷は，白川郷 IC を降りれば目と鼻の先である。白川郷は，私の心の故郷であり，十数年通いつづけてきた。白川郷のどぶろく〔にごり酒〕は，毎年出来が違い，味が違う。ことのほか美味である。高冷地野菜も格別に旨い。春の山間に観る白川の芽吹きの里は，実に神秘的で，自然の気高さを覚える。また岐阜県指定天然記念物になっている荘川桜は 500 年以上の命をつなぎ開花の美しさと尊厳さには，心を奪われる。この荘川桜は東海北陸自動車道のルートが御母衣ダム湖を通らなくなった為，旅をされる皆さんの目に触れることが少なくなるのが残念である。

とりわけこの荘川桜は，歴史に残る大工事により現在も命を燃やしているのである。時を去ること，荘川村の一部は御母衣ダムに沈んだ。かつては光輪寺と照蓮寺に巨桜がそれぞれ生い茂っていたが，今は湖畔で見事に咲き，春爛漫を告げ，白川郷の古い歴史と飛騨で浄土真宗が発祥した当時を忍ばせてくれる。

2 本の桜は樹齢およそ 500 年と言われているから寺の創建時に植えられたものと思われる。ご当地の説明によれば桜はアズマヒガンサクラで幹の周り約 6 m，高さは共に 30 m を超える巨桜である。ダム水没住民にとってはこの巨桜の荘川桜は故郷の唯一の名残である。そしてこの巨桜移植に関する大工事は荘川町の秘話として伝えられているが後世に語りつがれるべき美しい心の通う桜物語である。

昭和 27 年に御母衣ダム建設のことが総理府から発表されたことは平和で静かな佇まいにあった荘川町にとっては，たいへんな出来事であっただろう。なにしろ町の3分の1にあたる5集落が湖底に沈むとあっては，地元民の驚きと嘆きは想像を絶する。ダム建設反対には全力を尽くして行動されたことであろう。反対運動は長年にわたり曲折があったが，昭和 34 年の秋，電発会社との間に妥協が成立している。電発初代総裁高碕達之助氏は，やがて湖底に沈む集落を思い深い愛惜に胸をいためながら散策し光輪寺境内の老桜が眼に留まった。ここからが桜物語の圧巻である。地元の説明を引用すれば，高碕氏は通産大臣も務めた人で，人格高潔の名をもって知られた人であった。電発総裁には珍しい自然愛好者で，特に植物に深い関心と愛情をもっていて，東京の自宅には植物研究室を持っておられたという。その高碕氏がこの巨桜を見て，このまま水没させてしまうのは，いかにも耐え難いと強くおもわれた。

高碕氏は大学の専門家を訪ね，移植のことを相談してみたが誰一人賛成してくれる人がなく，かえってその無謀さを笑われたという。氏は困惑して数日の間考えこんでいたが，桜博士といわれた笹部新太郎翁のことを思い出し，神戸に同氏を訪ね，その念願を打明け移植に力を貸してほしいと熱心に頼みこんだ。笹部氏は，一生をかけて桜の研究に打ち込んできた人である。高碕氏の水没からあの桜のいのちをまもりたいという切々たる愛情と，水没住民へのせめてもの心の償いにもと，懇願するその申入れを，むげに拒むことはどうしてもできなかった。その人が私財を投げうって，この桜のいのちを助けたいというのである。笹部氏は，奇蹟ともみえるこの難事業に命をかける決意をし，老躯をひっさげて現地に赴いたのである。移植は 500 人の人夫を動員してはじまった。笹部氏の懇情に動かされた当時日本一の庭師丹羽政光氏が，選りぬきの植木職人 10 人をひきつれて，この大計画に参画した。

樹幹や枝を藁縄でていねいに巻き，100 m も張っている根を伐って，直径 5 m の根廻りは完全に巻かれた。40 t という巨大な桜を鉄橇にのせて，運搬のため，わざわざ新しく造った路を，コロを使ってブルで少しずつ引きずって，現在の中野展望台まで約 200 m を曳きあげたのである。

植林史上，かつてない大がかりな移植であった。翌くる年の 4 月，人びとの見守る中で，細枝にやわらかい芽が出た。そして，ポツッ，ポツッと花をつけた。まさに活着したのである。笹部氏の蘊蓄を傾けての努力が芽吹いたのである。年々少しの衰えもみせず，現在ではかつて両寺の境内にあったときのように，毎年美しい花が咲くようになった。…と云う桜で飛騨真宗発祥の気力をかんじる。

御母衣ダム湖畔の樹齢 500 年余の荘川桜

私は思うのである『学問は徳行にある』と。白川郷で頂くどぶろくは，この桜物語をして私の胸に感動を深めてくれる。

――すずき　てつしげ
㈱施設技術研究所　副社長――